ウィキ麻薬に溺れるウィキペディアン

東京工業大学　工学部　5類
澤田　一樹
（15_06842）

§Ⅰ　ウィキペディアとは

ウィキペディアを知っているだろうか。現代の日本社会において、この質問に No と答える者はマイノリティであろう。

ウィキペディアとは、コピーレフトなライセンス、つまり誰もがこの著作物を利用、再配布、改変できるという前提のもとで、ウィキメディア財団の運営するオンライン百科事典である。ただし、一口に「百科事典」と言っても、分厚く古めかしい紙の百科事典とは、わけが違う。ウィキペディアは、世界中の様々な言語で執筆されており、その項目数は、およそ 1 億 3500 万(2015 年 5 月)にものぼる。すべての利用者は、等しく、この膨大な知のデータベースにアクセスできるのである。

> *今や大学入学試験バカロレアで「優」ないし「優の上」をとる学生は情報ソースとしてウィキペディアを当たり前のように利用している。それを確認した後で、私は学生たちにいっそうの用心、批判精神、知的厳密さを持つようにと訴えた。しかし二時間にわたって説明し議論したが、理解してもらうのは困難だと諦めざるを得なかった。そのとき、「では、これまでどうやって調べていたのですか」との質問。唖然とした。ウィキペディアが登場する前、我々はもっときちんと調べていたのだから。*
> （ピエール・アスリーヌ他 2008, p.2）

ここからも、ウィキペディアの登場がいかに衝撃的なものであるかが読み取れる。ウィキペディアが登場する前は、図書館を駆けずり回り、膨大な資料を整理してようやく手にすることの出来た情報が、その正当性はどうあれ、キーボードを叩くだけで手に入るようになったのである。また同時に、今やこのウィキペディアが、現代の学生ないし何かを学ぼうとする者にとっては、必要不可欠なものとなったことも分かる。

§Ⅱ　ウィキペディアを支える人々

このようにウィキペディアを情報ソースとして用いることはあまり好ましくないとされるが、これはどうしてだろうか。

それは、ウィキペディアは匿名の編集者たちによって編集されているからである。それも、数人、数十人といった規模ではなく、全世界で実に 5500 万(2015 年 5 月)もの編集者によってウィキペディアは執筆されているのである。あまりに規模が大きく、その文章を書いた人間の身許も定かでないため、たとえ出典が引かれているとしても、ウィキペディアは不正確な情報の集合であるとする偏見にさらされている。

ウィキペディアは情報ソースとして適当であるかの議論は置いておくとして、ここではその膨大な数の編集者数に注目したい。

§Ⅲ　ウィキペディアはなぜ成り立つのか

ウィキペディアはなぜ成立し得るのだろうか。ウィキペディアの利用に対価を払う必要はないし、間接的に利益につながるようなウェブ広告も見受けられない。

ウィキペディアによると、ウィキペディアの運営は全額寄付金によって成り立ち、その膨大な

記事数はウィキペディアンと呼ばれる執筆者たちの存在によるとのことである。

ではそもそも、なぜ寄付をしたり、記事を書いたりする人物が現れるのだろうか。記事を書くことによって何らかの報酬が支払われるわけでもないのに、ウィキペディアンたちはどうして金銭、知識、労力を喜んで差し出すのだろうか。

彼らの立場から見れば、一般の利用者たちは自身らが労力をつぎ込んで作り上げたものに対価を支払わずしてタダ乗りする悪者に見え、ウィキペディアに貢献する行為自体が馬鹿らしく思えてこないだろうか。

それでもウィキペディアンは多数存在し、日夜ウィキペディアの拡大に貢献し続けている。ウィキペディアを支える人々がウィキペディアを支えんとする理由はどこにあるのだろうか。

§Ⅳ　ウィキ麻薬に溺れるウィキペディアン

ここにデレク・ラムジーという人物に関する興味深い例がかある。

> *ラムジーはコンピュータ・サイエンスを学ぶ細身の学生で、ロチェスター工科大学を卒業したばかりの二〇〇二年九月にウィキペディアと出会った。（中略）コンピュータ・サイエンスを学んでいた彼にとって、無秩序なウィキペディアはむずがゆくてしかたがなかった。（中略）しかし、それはジグソー・パズルのようなものだった。さまざまな形式の情報や無関係なデータがごちゃまぜになっていたのだ。ラムジーは、そういったデータを統一してウィキペディアに入力するという難問に立ち向かう決心をした。（中略）「職がなかったから、就職活動をしていないときは、一日に何時間もウィキペディアに取り組んだ」（中略）入力を終えると、ラムジーの喜びのスイッチが入る。それが彼にとって一服目の「ウィキ麻薬」だった。ウィキペディアンが、ウィキペディアの中毒をあらわすときに使う不謹慎なスラングだ。*
> （アンドリュー・リー 2009, pp.201-204）

ラムジーは自分の余暇を、ウィキペディアの編集につぎ込んでいるが、どうやら、彼はウィキペディアを支えるだとか、タダ乗りする人々がどうとか、そういったことは全く考えてもいないようである。

もう一人、エスプリ・フュガスという名前で活動する別の女性ウィキペディアンの例を見てみよう。

> *「私にとって、ウィキペディアは豊かな経験を与えてくれるものです。それは見事に、私の考えと合っているのです。誰からも無視されず、注目されるからです。（中略）私にとって、ウィキペディアは全く利害の絡まない方法で知識を共有する素晴らしいツールとなっています。私の理想にとって完全なのです。安っぽく理想を訴える他の方法もありますが、それには馴染まないのです」エスプリ・フュガスはもっと先を行っている。彼女はウィキペディアなしに生活できなくなっている。「調子の良い日には、一〇時間でもサイトと向き合うことが出来ます。しかし忙しくなれば、毎晩二、三時間しかとれないでしょう」とある種の依存症にかかっているのを認めているようだった。「今朝、私のコンピュータが故障してしまったの。だから、今は喫煙者の禁断症状のよう」。もしエスプ*

リ・フュガスが惜しげも無くサイトに時間を費やし過ごしているとすれば、オンラインのロール・プレイのような「ゲーム」としてそれを理解しているからではなかろうか。
（ピエール・アスリーヌ他 2008, pp.46-47）

彼女もまた、自分自身のために記事を書いているようにみえる。両人とも、ウィキペディアの記事執筆作業を、パズルゲームや、ある種のロールプレイングゲームのような、娯楽性を持つものとして捉え、またそれに麻薬的な魅力を感じていることが読み取れる。また、エスプリ・フュガスの例では、彼女がウィキペディアに書き込むことによって、自己顕示欲や承認欲求を満たしているだろうことも分かる。

つまり、ウィキペディアンはそもそも、一般の利用者だけが甘い汁を吸っているだとか、そういったことは考えてもいなかったのだ。彼らは、"自分自身”だけのために記事を書いている。自分が楽しいからやる、自分の知識や考えを他人に認めて欲しいからやる、他人が得しているかどうかなど、彼らにとってはどうでもいいことなのだ。むしろ、記事を読みに膨大な数の人々が訪れるウィキペディアは、彼の欲する場所であったのである。

§Ⅴ　編集合戦

エスプリ・フュガスの言葉から分かるように、ウィキペディアの記事は、純粋な事実のみならず、編集者の理想や思惑がある程度反映されてしまう。これが原因となって、しばしば「編集合戦」という争いが起きる。これは、ある記事の編集に対して、違う考えを持つ人や、個人の考えが反映されていることを良しとしない人がこぞって同じ記事を編集し、記事の内容が目まぐるしく変更され、秩序が無くなってしまうことである。しかし、この争いによる記事の編集と論争から、真実に即した記事に仕上がっていくため、ウィキペディアは記事に対する問題提起と論争を推奨している。

こうした争いは、自分の考えを多くの利用者に理解してほしいという編集者の自己顕示欲からくるものであって、コンピューター・ゲームにおいて誰もが優位に立ちたいと考えるのと似ている。ここから、ウィキペディアンが編集合戦を「対人ゲーム」のようなものとして取り組んでいるとも考えられる。

§Ⅵ　ウィキペディアンとゲーマー

ウィキペディアには「編集回数の多いウィキペディアンの一覧」というページが存在するというのが面白い。このページでは、ランキング形式で熱烈なウィキペディアンの名前が紹介されている。このシステムは、一世を風靡するソーシャル・ゲームがプレイヤーを取り込むために設けるプレイヤー・ランキングと非常に良く似ていないだろうか。ランキングによって自分が優位に立っていることが見えやすくなり、ゲームなり、執筆なりに取り込む意欲は更に増幅されていく。世界で最も編集回数の多いウィキペディアンは一日に 500 を超える記事を編集しており、一つのものに情熱を捧げ続けるその姿はヘビー・ゲーマーに重なるものがある。

§Ⅶ　結論：ウィキペディアの存在

ウィキペディアンは、自分の欲を満たすために記事を書く。ウィキペディアは、彼らの営みによって成立し、一般利用者は、容易に知識を得ることができる。ウィキペディアはWin-Winの関係によって成り立っていたのだ。

ここで、単に書き手と読み手の二者のみが存在し、書き手は書く、または書かない、読み手は読む、または読まないものとモデル化してみよう。書き手はウィキペディアに書くのが好きなのだから、書くことで利益を得るし、読み手がそれを読めば自己顕示欲も満たされることになるが、書かないからといって損をすることはない。読み手はウィキペディアを読むことで、簡単に知識を手に入れることができるが、読まなかったり、そもそも書き手が書いていなければ情報を手に入れるのに時間がかかって損をしてしまう。これを利得行列に表してみる。

表１：利得行列

		書き手	
		書く	書かない
読み手	読む	1, 2	-1, 0
	読まない	-1, 1	-1, 0

すると、書き手は書くことが支配戦略であり、読み手は読むことが支配戦略てある。この場合、支配戦略均衡であるとも見ることが出来る。

参考文献

1. ピエール・アスリーヌ他(2008)『ウィキペディア革命―そこで何が起きているのか？』（佐々木勉 訳）岩波書店
2. アンドリュー・リー(2009)『ウィキペディア・レボリューション―世界最大の百科事典はいかにして生まれたか』（千葉敏生 訳）早川書房
3. ウィキペディア – Wikipedia [http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%82%AD%E3%83%9A%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2](2015/05/31)
4. List of Wikipedias - Wikipedia, the free encyclopedia [http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_Wikipedias](2015/05/31)
5. Wikipedia:List of Wikipedians by number of recent edits - Wikipedia, the free encyclopedia [http://en.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:List_of_Wikipedians_by_number_of_recent_edits](2015/05/31)